

日本における中国画題綜覧 (十)

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (10)

けい行 (二)

けいすいしゅんゆうのぞ 溪水春遊圖

金の趙閑閑の七言詩「春遊」によるものである。

【出典】

秉文、字周臣、滏陽人、閑閑其自號也。幼穎悟、讀書若夙習。大定二十五年進士、應奉翰林文字。「中略」坐譏訕免官、未幾起爲同知岢嵐軍州事、轉北京路轉運司度支判官。「中略」貞祐初、中國仍歲被兵、公建言時事可行者三、一遷都、二導河、三封建。朝廷略施行之。四年、除翰林侍講學士。明年轉侍讀與定中、拜禮部尚書兼侍讀同修國史、知集賢院。開興正月、京師戒嚴、時公已老、日以時事爲憂、雖食息、頃不能忘。每聞一事可便民、一士可擢用、大則拜章、小則爲當路者、言殷勤、鄭重不能自己竟用、是得疾薨、年七十四。「御訂全金詩增補中州集」卷九
無數飛花送小舟、蜻蜓欵立釣絲頭。一溪春水關何事、皴作風前萬疊愁。(趙秉文「春遊三首」、『御定全金詩增補中州集』卷九)

【作例】

「溪水春遊圖」(晚香散人内藤道有作、橘守国繪『和漢新圖扶桑畫譜』卷五、享保二〇年 [1735] 刊本)

けいていさん 敬亭山

敬亭山は宣州(安徽省宣城)の北にある。また「昭亭山」ともいう。李白の五言絶句『独坐敬亭山』で有名である。

【出典】

敬亭山在寧國府西十里之霞石埠、連峯如屏、蒼翠鬱然。晉謝玄暉守宣州時、常登遊焉。李太白獨坐敬亭山詩云、衆鳥高飛盡、孤雲獨去閒。相看兩不厭、只有敬亭山。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理七卷)

【作例】

「敬亭山」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理七卷、萬曆37年 [1609] 刊本)

「敬亭山」(法眼橋保国撰『繪本詠物選』卷二、安永八年 [1779] 刊本)

「獨坐敬亭山」(石峯橘貫撰『繪本唐詩選』卷一、文化二年 [1805])

張 小 銅
Zhang Xiaogang
青 山 愛
AOYAMA Ai

刊本）

けいとう 鶏頭

鶏頭は水の中に生えている。葉っぱは大きくて蓮の葉っぱのように、皺があり棘があり、俗に「鶏頭盤」という。花の下に実があり、その形は鶏の頭のようなものである。

【出典】

鶏頭生水澤中，葉大如荷，皺而有刺，俗謂之雞頭盤。花下結實，其

形類雞頭，故以不之。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷）

【作例】

「鶏頭」〔明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「鶏頭」〔牧溪筆〕（法眼周山編『和漢名筆畫英』卷一、寛延三年 [1750] 刊本）

けいぼうすいりつ 京房推律

前漢の京房（前77～前37）はもと李という姓で、字は君明といい、東郡頓丘（河南省清風）の人である。『易』に造詣が深く、「京氏之学」と呼ばれる。また、音律に長け、災害の変異により政治の予言をすることも得意である。後に大臣石頭の讒言により処刑されたという。

【出典】

京房受易梁人焦延壽。延壽云嘗從孟喜問易。會喜死，房以為延壽易即孟氏學，翟牧、白生不肯，皆曰非也。至成帝時，劉向校書，考易說，以為諸易家說皆祖田何、楊叔、丁將軍，大誼略同，唯京氏為異，黨焦延壽獨得隱士之說，託之孟氏，不相與同。房以明災異得幸，為石顯所譖誅，自有傳。房授東海殷嘉、河東姚平、河南乘弘，皆為郎、博士。繇是易有京氏之學。（漢・班固撰『漢書』卷八十八）

前漢京房字君明，東郡頓丘人。治易事梁人焦延壽。壽曰，得我道以亡身者京生也。其說長於災變。分六十卦，更直日用事，以風雨寒溫為候，各有占驗。房用之尤精。好鐘律知音聲。孝元時以孝廉為郎。與石顯、五鹿充宗有隙。出為魏郡太守。房自知數以論議為大臣所非，不欲遠離左右。及為太守憂懼，乃上封事言災異。既而顯告，房非謗政治，歸惡天子，註誤諸侯王。遂棄市。房本姓李，推律自定為京氏。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「京房推律」〔下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷八、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

けいようかんい 榮陽桓偉

榮陽（河南省榮陽）の桓偉は蘭亭四十二人（四十三人）の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「榮陽桓偉」〔文鳳山人絵「文鳳駿聲」』『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本）

けいようこう 景陽岡

景陽岡は山東省陽谷県にある。小説『水滸伝』には武松が虎を退治する舞臺とされる。

【作例】

「景陽岡」〔柳水亭種清著、葵岡北溪畫『水滸畫傳』、安政三年 [1856] 序、甘泉堂板）

けいようこうじょう 景陽岡武松

↓「行者武松」

【作例】

「景陽岡武松打虎」(百回本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』第二十三回、萬曆三八年 [1610] 容興堂刊本)

「景陽岡武松」(溪斎義信筆『溪斎浮世畫譜』)

けいりよめいが 嵇呂命鴛

晉の嵇康(223-262)は、字は叔夜といい、譙国の(安徽省亳州)の人である。鍛屋が好きで、夏に柳の下でよく鍛屋をする。東平(福建省松溪)の呂安(282)が康のことを慕い、遙々に会いにやってくる。康は彼をよくもて成したという。後に嵇康と一緒に処刑されたという。

【出典】

晉書 嵇康字叔夜、譙國銍人。性巧而好鍛、宅中有一柳樹甚茂、乃激水圍之。每夏月居其下以鍛。東平 呂安服其高致、每一相思、輒千里命鴛、康友而善之。(唐・李瀚撰『蒙求集注』卷上)

【作例】

「嵇呂命鴛」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』卷二、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

けいわぼく・さいしよじょうていをむかえるず

邢和璞・崔曙迎上帝圖

↓「上帝戲臣」

【作例】

「邢和璞・崔曙迎上帝圖」(橘有税『橘氏宗兵衛』『繪本寫寶袋』卷七、

享保五年 [1720] 刊本、明和七年 [1770] 橘氏守国再板)

げきおつのず 擊壘圖

↓「司馬温公」

【作例】

「擊壘圖」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷三、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

げきせんいつし 卻詭一枝

晉の卻詭は、字は広基といい、濟陽單父(山東省單県東)の人である。博学で多才の持ち主である。武帝は詭に「君のことを自分でどう思う」と尋ねた。詭は「臣下は賢人推挙の対策で天下第一とされる。桂木の林の一枝のようで、崑崙山の一枚の玉のようなものに過ぎない」と答えたという。(唐・房玄齡等撰『晉書』卷五十二)

【出典】

晉書 卻詭字廣基、濟陽單父人。博學多才、瓌偉倜儻、不拘細行。州郡禮命並不應。泰始中、舉賢良、對策上第、拜議郎、遷雍州刺史。武帝於東堂會送問詭曰、卿自以為何如。詭對曰、臣舉賢良對策為天下第一、猶桂林一枝、崑山片玉。帝笑詭在任威嚴明、斷其得聲譽。(唐・李瀚撰『蒙求集注』卷上)

【作例】

「卻詭一枝」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷三、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

げきちくこうぜん 擊竹恒然

↓「香巖擊竹」

【作例】

「撃竹恒然」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、文政一年 [1818] 再刊本）

げきちくへいどう 撃竹悟道

↓「香巖撃竹」

【作例】

「撃竹悟道」（文鳳山人絵「文鳳駿聲」「文鳳畫譜」三編、文化八年 [1811] 刊本）

「撃竹悟道」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本）

げきもつじつぎ 劇孟一敵

前漢の劇孟は洛陽の人である。周亜夫は太尉となり、河南で劇孟を得る。喜んで言った、「呉、楚が大事を挙げ、しかも劇孟を求めないのは、彼らが無能であることがわかる。」と。天下が騒動する際、大將軍が彼を得ることは一敵国のようである。

【出典】

前漢 劇孟、洛陽人。以俠顯。吳楚反時、條侯周亞夫為太尉、東將至河南、得劇孟。喜曰、吳楚舉大事、而不求劇孟、吾知其無能為已。天下騒動、大將軍得之、若一敵國。（唐・李瀚『蒙求集注』卷上）

【作例】

「劇孟一敵」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』卷二、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

げだつしゅくへい 解脱粥籠

「解脱粥籠」は禪宗の公案の一つである。文殊が解脱に印可を与え

た後、久しくして、解脱を試したところ、解脱がいつものように皆さんのために粥を作り、文殊を見ないふりをする。文殊は「私は文殊だ、私は文殊だ」と言ったが、解脱は「文殊は文殊、解脱は解脱だ」と応じた。すると、文殊が姿を消したという。

【出典】

解脱禪師、既蒙大聖指示心印、乃謙卑自牧、專精侍衆、厥後、大聖躬臨試驗、脫每清旦、為衆營粥、大聖忽現於前、脫殊不顧視。大聖警曰、吾是文殊、吾是文殊。脫應聲曰、文殊自文殊、解脱自解脱。大聖審其真悟、還隱不現。於是遠近輻湊、請益如流。（唐・慧祥撰『古清涼傳』卷上、大正新脩大藏經第五十一卷）

【作例】

「解脱粥籠」（橘宗重著、長谷川等雲繪『増補繪本寶鑑』卷二、享保年間 [1716～1736] 刊本）

げっかだいしょう 月下大笑

「月下大笑」は「月下大嘯」の誤りであり、禪宗の公案の一つである。

【出典】

師「注・藥山惟儼禪師」一夜登山經行、忽雲開見月、大嘯一聲、應灑陽九十里許、民居盡謂東家、明晨迭相推問、直至藥山。徒衆曰、昨夜和尚山頂大嘯。李「注・李翱」贈詩曰、選得幽居愜野情、終年無送亦無迎、有時直上孤峯頂、月下披雲嘯一聲。（宋・普濟撰『五燈會元』卷五、石頭遷禪師法嗣）

【作例】

「月下大笑」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年 [1687] 刊本、文政元年 [1818] 再刊本）

げつきゅうでん 月宮殿

月宮殿はまた「広寒宮」ともいう。伝えることによると、嫦娥等の仙女たちが住んでいるという。唐の玄宗帝が月宮に行ったことがあるという伝説もある。（「霓裳羽衣舞」の条を参照）

【出典】

唐明皇八月望日遊月宮、見天府榜曰廣寒清虛之府。少前、見素娥十餘人皆乘白鸞舞於桂下。龍城錄。冬至後月養魄於廣寒宮。十洲記。（宋・潘自牧撰『記纂淵海』巻二）

【作例】

「月宮杵墨圖」（明・程大約撰『程氏墨苑』巻二、萬曆年間 [1573～1620] 刊本）

「唐王遊月宮」（明・張子俊撰『大備對宗』、萬曆二八年 [1600] 刊本）

げつきゅうにのぼる 昇月宮

↓「霓裳羽衣」、「月宮殿」

げっこうどくしよ 月光読書

江泌、字は士清といい、濟陽考城（今日河南省蘭考）の人である。若い頃、貧しくて、月下で読書したことが有名な逸話である。

【出典】

江泌、字士清、濟陽考城人也。父亮之、員外郎。泌少貧、晝日斫屨、夜讀書、隨月光握卷升屋。（梁・蕭子顯撰『南齊書』巻五十五、列傳第三十六）

げっし 月支

月支は西域の月支国のことである。

【出典】

控弦破左的、右發權月支。注、左的、月支皆射帖。以予觀之、非也。西域有月氏國、氏音支、疑此是也。「曹子建」（宋・葉廷珪撰『海錄碎事』巻四上）

秦及漢初爲月支、匈奴之地。武帝開其地、後、分酒泉、置燉煌郡。即古瓜州也。（明・王樵撰『尚書日記』巻五）

【作例】

「月支」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻三、貞享四年 [1687] 刊本、文政元年 [1818] 再刊本）

「月支」（某岡之繪『繪圖の林』巻上、元禄二年 [1689] 刊本）

けっぴんろつこく 結賓郎國

結賓郎國は町があり、農業をする。黄頭仙人が修行して仙人になったところである。応天府（江蘇省南京）までは馬で三年かかるという。

【出典】

結賓郎國有城池、種田、黄頭仙人成道處。至應天府馬行三年。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻）

【作例】

「結賓郎國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻、萬曆三七年 [1609] 刊本）

「結賓郎國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年 [1719] 刊本）

けんえんし 軒轅氏

軒轅氏は黄帝のことである。黄帝は伝説の五帝の一人で、姓が公孫、名が軒轅という。

【出典】

黃帝者、少典之子、姓公孫、名曰軒轅。生而神靈、弱而能言、幼而
 徇齊、長而敦敏、成而聰明。軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵犯、
 暴虐百姓、而神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享、諸侯
 咸來賓從。而蚩尤最爲暴、莫能伐。炎帝欲侵陵諸侯、諸侯咸歸軒轅。
 軒轅乃修德振兵、治五氣、藝五種、撫萬民、度四方、教熊羆貔貅羆
 虎、以與炎帝戰於阪泉之野。三戰、然後得其志。蚩尤作亂、不用帝
 命。於是黃帝乃徵師諸侯、於蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤。而諸
 侯咸尊軒轅爲天子、代神農氏、是爲黃帝。「中略」有土德之瑞、故
 號黃帝。（漢・司馬遷撰『史記』卷一、五帝本紀第一）

【作例】

「黃帝軒轅氏」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物一卷、萬曆三
 七年 [1609] 刊本）

「軒轅氏」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年 [1719] 刊
 本）↓「黃帝」

げんがいでんべき 元凱傳癖

晉の杜預（222-284）は、字は元凱という。彼は『春秋左氏伝』の
 集解に没頭する。時に王済は相馬するのが得意で、和嶠は財を収斂す
 ることが得意である。杜預はかつて「王済はよく馬の癖があり、和嶠
 は財癖がある」と言った。それに対し、武帝は「君に何の癖がある」と
 尋ね、預は「『左伝』の癖がある」と答えたという。（『晉書』卷三二
 十四）

【出典】

『晉書』杜預字元凱。既立功之後、從容無事。乃耽思經籍、爲春秋
 『左氏經傳集解』又參考衆家譜第、謂之釋例、又作蒙會圖『春秋長歷』
 備成一家之學。比老乃成。又撰女記讚。當時論者謂、預文義質直。

世人未之重。唯秘書監摯虞賞之曰、左丘明本爲春秋作傳。而左傳遂
 自孤行。釋例本爲傳設。而所發明、何但左傳。故亦孤行。時王濟解
 相馬、又甚愛之。而和嶠頗聚斂。預嘗稱、濟有馬癖、嶠有財癖。武
 帝聞之謂曰、卿有何癖。對曰、臣有左傳癖。終司隸校尉。位特進。
 贈征南大將軍。初預好爲後世名、常言高岸爲谷、深谷爲陵。刻石爲
 二碑、紀其勳績、一沈萬山之下、一立峴山之上。曰、焉知此後不爲
 陵谷乎。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「元凱傳癖」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷八、
 享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

げんかん 阮咸

阮咸、字は仲容といい、陳留尉氏（河南省尉氏）の人である。父親
 阮熙は武都の太守である。叔父阮籍と竹林に遊びに行く。当時の保守
 派は咸の行動に批判的であった。咸は籍と道南に住んでいる。北に住
 んでいる阮は金持ちだが、南に住んでいる阮は貧しい。七月七日に北
 の阮は沢山の服を干す。皆錦や刺繍のものばかりで人の目を奪うほど
 きれいである。咸は庭で竿に粗末な布で作った服を掛けた。ある人は
 それを不思議に思い、尋ねると、「俗を免れない。一応私もこのよう
 にやった。」と答えた。山濤は咸を推挙したが、武帝は咸が酒に明け
 暮れているので、遂に起用しなかった。

【出典】

『咸字仲容。父熙、武都太守。咸任達不拘、與叔父籍爲竹林之遊。當
 世禮法者譏其所爲。咸與籍居道南、諸阮居道北。北阮富而南阮貧。
 七月七日北阮盛曬衣服、皆錦綺粲目。咸以竿掛大布犢鼻於庭、人或
 恠之、答曰、未能免俗、聊復爾耳。歷侍散騎侍郎、山濤舉其典選曰、
 『阮咸貞素寡欲、深識清濁萬物不能移。若在官人之職、必絕於時。』武

帝以咸耽酒浮虛，遂不用。(唐・房玄齡等撰『晉書』卷四十九，列傳第十九)

【作例】

「阮咸」(橘有税撰『繪本故事談』卷三、正徳四年[1714]刊本)

げんかんこうたつ 阮簡曠達

阮簡は阮咸の姪である。

【出典】

舊注，引竹林七賢論曰，阮簡咸之從子。亦以曠達自居。父喪行遇大雪寒凍。遂詣浚儀令。令爲他賓設黍。簡食之，以致清議。廢頓幾二十年。(唐・李瀚撰『蒙求』)

【作例】

「阮簡曠達」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷五、享和元年[1801]序刊本、河内屋等發行)

けんぎゅうか 牽牛花

↓「牽牛子」

【作例】

「牽牛花」(溪齋義信筆『溪齋浮世畫譜』)

「牽牛花」(鮮齋永濯繪『萬物雛形畫譜』初編、明治二十一年[1899]刊本)

けんぎゅうし 牽牛子

牽牛子はまた「金鈴」ともいう。至るところにある。二月に種を撒き、三月に苗を植え、七月に花が咲き、八月に実り、九月に収穫する。

【出典】

牽牛子，舊不著所出州土，今處處有之。二月種子，三月生苗。作藤

蔓遠籬牆，高者或三二丈。其葉青，有三尖角。七月生花，微紅帶碧，色，似鼓子花而大。八月結實，外有白皮裹作毬，每毬內有子四五枚，如蕎麥大，有三稜，有黑白二種。九月後收之。又名金鈴。(明・王圻，王思義撰『三才圖會』草木四卷)

【作例】

「牽牛子」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二卷、萬曆三十七年[1609]刊本) ↓「牽牛花」

けんぎゅうしよくじよ 牽牛織女

言い伝えによると、天河は海に通じているという。近頃、世の中に海の傍に住んでいる人は、毎年八月に筏に乗って行き来している。いつも時期通りである。ある人が奇想天外で飛閣の屋根に立ち、沢山の食糧を持って筏に乗っていった。十数日の間、日月星辰を見ているばかりで、その後恍惚の状態に陥り、昼夜もわからなくなった。やつと一つの町のようなところに辿り着いた。警備は甚だ厳しい。遠いところから宮中を見て、中には大勢の織女がいる。一人の男の人が牛を連れて渚に水を飲ませにきたが、筏に乗る人を見て驚いた。「なぜここに来たか。」と。筏に乗る人はわけを説明して、「ここはどこか。」と尋ねた。「あなたは蜀郡の嚴君平に聞いたらわかる。」と答えた。結局上陸せず、予定通り帰還した。後に蜀に行つて、君平に尋ねた。君平は「某年某月某日に客星が牽牛宿を犯した。」と答えた。その時間を計算すると、ちょうどこの人が筏に乗って天河に辿り着いた時であった。

【出典】

舊説云、天河與海通。近世有人居海渚者，年年八月有浮槎去來，不
失期，人有奇志，立飛閣於查上，多齎糧，乘槎而去。十餘日中，猶
觀星月日辰，自後茫茫忽忽，亦不覺晝夜。去十餘日，奄至一處，有

城郭状、屋舍甚嚴。遙望宮中多織女、見一丈夫牽牛渚次飲之。牽牛人乃驚問曰、何由至此。此人具說來意、并問此是何處、答曰、君還至蜀郡訪嚴君平則知之。竟不上岸、因還如期。後至蜀、問君平、曰、某年月日有客星犯牽牛宿。計年月、正是此人到天河時也。（晉・張華撰『博物志』卷十）

【作例】

「嚴君平」〔明・陳洪綬繪『博古葉子』、順治九年〔1652〕刊本〕

げんけん 原憲

原憲、字は子思といい、魯の人である。一説は宋の人である。原憲は孔子の弟子であり、孔子より三十六歳年下である。孔子が亡くなった後、原憲は衛国の田舎に生活しており、大変貧しかった。子貢が衛国の宰相になって、四匹馬の馬車に乗って原憲に会いに行つた。原憲はボロボロの服を着て出迎えた。子貢はそれに恥じたが、原憲は全然気にしなかつた。そのため子貢は反省させられた。原憲は生涯その質素な生活を貫いたのである。

【出典】

原憲字子思。子思問恥。孔子曰、國有道穀。國無道穀恥也。子思曰、克伐怨欲不行焉、可以爲仁乎。孔子曰、可以爲難矣。仁則吾弗知也。孔子卒、原憲遂亡在草澤中。子貢相衛。而結駟連騎、排藜藿入窮閭、過謝原憲。憲攝敝衣冠見子貢。子貢恥之曰、夫子豈病乎。原憲曰、吾聞之、無財者謂之貧、學道而不能行者謂之病。若憲貧也、非病也。子貢慙、不慚而去。終身恥其言之過也。（漢・司馬遷撰『史記』卷六十七、仲尼弟子列傳第七）

【作例】

「原憲」〔明・陳洪綬繪『博古葉子』、順治九年〔1652〕刊本〕

「先賢原子」〔明・呂維祺編『聖賢像讚』卷二、崇禎五年〔1632〕序

刊本）

「原憲」〔任渭長畫傳四種〕高士傳、中国古畫譜集成第四卷、山東美術出版社、2000年）

「原憲」〔馬場信意撰『分類畫本良材』卷三、正徳五年〔1715〕刊本〕
↓「子思」

げんこうしよしかについでくすりをえる

阮孝緒隨鹿得藥

阮孝緒は、字は士宗といい、陳留尉氏の人である。母親が病気になる、薬に「生人蓐」という薬草が必要なため、孝緒は山に入った。忽然、孝緒の前に一匹の鹿が現れた。すると、孝緒がその鹿の後ろについて行つた。あるところで鹿が突然姿を消した。孝緒がよく見ると、その場所に薬草が生えていた。後に母親が薬を飲み、病気が治つたという。

【出典】

阮孝緒字士宗、陳留尉氏人也。父彦之、宋太尉從事中郎、以清幹流譽。「中略」後於鍾山聽講、母王氏忽有疾、兄弟欲召之。母曰、孝緒至性異通、必當自到。果心驚而反。鄰里嗟異之。合藥須得生人蓐、舊傳鍾山所出。孝緒躬歷幽險、累日不逢。忽見一鹿前行、孝緒感而隨後、至一所遂滅、就視、果獲此草。母得服之遂愈、時皆言其孝感所致。（唐・李延壽撰『南史』卷七十六、列傳第六十六）

【作例】

「阮孝緒隨鹿得藥」〔貝原先生遺稿、浦川公左畫圖『續二十四孝繪抄』、天保一三年〔1832〕、嵩山房・宋榮堂合梓〕

げんこくとせつ 彦國吐屑

晉の胡毋輔之の字は彦国といい、泰山の奉高の人である。王澄、王

敦、庾敷と共に「四友」と呼ばれる。澄は「彦国が素晴らしい言葉がいい、木の屑の如く、香ばしい香が絶えない。」という。

【出典】

晉胡毋輔之字彦國，泰山奉高人。少有知人之鑒。性嗜酒，任縱不拘小節。與王澄、王敦、庾敷俱爲太尉王衍所昵。號曰四友。澄嘗與人書曰，彦國吐佳言，如鋸木屑，霏霏不絕。誠爲後進領袖也。元帝時爲湘州刺史。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「彦國吐屑」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷三、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

けんし 涓子

涓子は齊人である。餌術を好み、その精を受けて食べる。三百年になつて齊で現れた。『天地人経』四十八篇を著した。後に荷澤で鯉を釣り、腹の中に符があつた。宕山に隠れた。風雨を興すことができる。伯陽九仙法を覚えた。淮南の王安が若い頃その文章を得たが、その意味を理解できなかった。その『琴心』三篇はよく整理されている。

【出典】

涓子者，齊人也。好餌術，接食其精。至三百年，乃見於齊。著天人經四十八篇。後釣於荷澤得鯉，腹中有符。隱於宕山，能致風雨，受伯陽九仙法。淮南王安少得其文，不能解其旨也。其琴心三篇，有條理焉。（漢・劉向撰『列仙傳』卷上）

【作例】

「涓子」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

「涓子」（林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年〔1712〕序、享保六年〔1721〕刊本）

「涓子」（歙形蕙齋撰『人物略畫式』、文化一〇年〔813〕刊本）
 「涓子」（滝澤清畫『潛龍畫譜』人物之部、明治一五年〔882〕刊本）
 「涓子」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』一、天明四年〔1784〕刊本）

けんし 蜺子

蜺子和尚は不詳である。彼は毎日川沿いで蜺子（シジミ）を拾うため、地元の住民に「蜺子和尚」と呼ばれていた。

【出典】

京兆府蜺子和尚，不知何許人也。事蹟頗異，居無定所。自印心於洞山，混俗閩川，不畜其道，不循律儀。冬夏唯披一衲，逐日沿江岸採掇蝦蜺，以充其腹。暮即宿東山白馬廟紙錢中。居民目爲蜺子和尚。（宋・普濟撰『五燈會元』第十三、洞山价禪師法嗣）

【作例】

「蜺子」（蕙齋北尾政美撰『諸職畫鑑』、寛政六年〔1794〕刊本）
 「蜺子」（文鳳山人撰『文鳳駿聲』、『文鳳畫譜』三編、文化八年〔1811〕刊本）

「蜺子」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年〔1687〕刊本、文政一年〔1818〕再刊本）

「蜺子」（鈴鄰松筆『狂畫苑』中、明和六年〔1769〕序、安永四年〔1775〕刊本）

けんしおしょう 蜺子和尚

↓「蜺子」

けんしゅう 倦繡

【作例】

「倦繡」[晋昌唐寅筆]（老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』下巻、享和三年[1803]序、文化六年[1809]叙刊本）

げんしゅう 阮脩

阮脩、字は宣子といい、陳留尉氏（河南省尉氏）の人である。阮籍の姪である。老子を好み、よく清談をした。人との付き合いは苦手であった。太尉王夷甫は彼に会って「老荘は聖教と同じか、それとも違うでしょうか。」と尋ねた。「同じではないでしょうか。（将無同）」と答えた。太尉は彼の答えに気に入り、自分の部下としての掾（官職名）に任用した。世に「三語掾」と言われた。すなわち「将無同」といった三文字の答えで得た官職という意味である。衛玠は「一語で起用されるのに、なぜ三なの。」と、宣子をかからかったが、宣子は「もし天下の人が望んだら、一も必要でないだろう。」と。ついに友人になった。鴻臚卿、太傅行参軍、太子洗馬を歴任した。後に南へ行く途中、賊に殺害された。わずかに四十二歳であった。↓ 阮宣杖頭

【出典】

脩、字宣子。好易老、善清言。嘗有論鬼神有無者、皆以人死者有鬼、脩獨以爲無。曰、今見鬼者云、著生時衣服、若人死有鬼、衣服有鬼邪。論者服焉。後遂伐社樹、或止之、脩曰、若社而爲樹、伐樹則社移。樹而爲社、伐樹則社亡矣。性簡任、不修人事。絶不喜見俗人、遇便舍去。意有所思、率爾褰裳、不避晨夕、至或無言、但欣然相對。常步行、以百錢掛杖頭、至酒店、便獨酣暢。雖當世富貴而不肯顧、家無儋石之儲、宴如也。與兄弟同志、常自得於林阜之間。[略]王敦時爲鴻臚卿、謂脩曰、卿常無食、鴻臚丞差有祿、能作不。脩曰、

亦復可爾耳。遂爲之。轉太傅行参軍、太子洗馬。避亂南行、至西陽期思縣、爲賊所害、時年四十二。（唐・房玄齡等撰『晉書』卷四十九、列傳第十九）

阮宣子有令聞、太尉王夷甫見而問曰、老荘與聖教同異。對曰、將無同。太尉善其言、辟之爲掾。世謂三語掾。衛玠嘲之曰、一言可辟、何假於三。宣子曰、苟是天下人望、亦可無言而辟、復何假一。遂相與友。（南朝宋・劉義慶撰『世說新語』文學第四）

【作例】

「阮脩」〔橋有税撰『繪本故事談』卷七、正徳四年[1714]刊本〕

げんじょうさんぞう 玄奘三蔵

玄奘三蔵は唐代の和尚である。貞観三年(633)、玄奘はインドに仏法を求めに行つた。途中、高昌、突厥を経由して、罽賓に着いた。虎や豹が群がって、これ以上前に行けなくなったため、玄奘が門を閉じて坐禪するだけであつた。夕方になつて門が開いた。一人の老僧が入り、挨拶を交わした後、玄奘に般若心経を口授した。後の旅はすべて順調で、遂に佛国に到着した。そこでいろいろ修行をし、いろいろの經典や仏像をもらい、百五十あまりの国を経由し、いろいろの苦難を乗り越えて帰国した。貞観十九年(645)の冬、玄奘がようやく都の長安に戻つた。唐の太宗が玉華寺に住むよう勅令を下した。そこで玄奘が經典を千三百三十巻翻訳した。亡くなつた後、白鹿原に葬られた。

【出典】

沙門玄奘、俗姓陳、偃師人。少聰敏、有操行。貞観三年、因疾而挺志往五天竺國。凡經十七歲、至貞観十九年二月十五日方到長安。足所親踐者、一百一十一國。探求佛法、咸究根源、凡得經論六百五十七部、佛舍利并佛像等甚多。京城士女迎之、填城隘郭。時太宗在東都、乃留所得經像於弘福寺。有瑞氣徘徊、像上移晷乃滅。遂詣駕、

并將異方奇物朝謁太宗，謂之曰，法師行後，造弘福寺，其處雖小，禪院虛靜，可爲翻譯之所。太宗御製聖教序。高宗時爲太子，又作述聖記。並勒於碑。麟德中，終於坊郡玉華寺。玄奘撰西域記十二卷，見行於代。（唐・劉肅撰『唐新語』卷十三）

【作例】

「玄奘取經」（明釋寶成撰『釋氏源流』卷三、成化二二年〔1466〕刊本）

げんしようながれてつきず 沅湘流不盡

唐の戴叔倫の「三閭（さんりよ）廟（びょう）」という五言絶句の詩句である。

【出典】

沅江流不盡，屈子怨何深。日暮秋風起，蕭蕭楓樹林。（戴叔倫「三閭廟」，明・李攀龍編『全唐詩』卷六・五言絶句）

【作例】

「沅湘流不盡」（石峯先生書畫『畫本唐詩選』、天明八年〔1788〕原刻、文化二年〔1805〕再刻本）

「沅湘流不盡」（『百人一詩畫譜』、安永三年〔1774〕原刻、寛政六年〔1794〕再刻本）

げんしりょう 嚴子陵

嚴光、字は子陵といい、名はまた遵ともいい、會稽余姚（浙江省余姚）の人である。子供の頃から名声があり、光武帝と共に遊学した。後に光武帝が即位すると、光はすぐ名前を変え隠れた。帝は光が賢人だと思い、人を派遣して光を探した。後に齊国から一人の男の人が羊の裘を被って湖辺で釣りをしている情報が寄せられた。帝はその人が光と疑い、使者を派遣し迎えに行かせた。三回迎えに行つてやつと

ついできた。北軍に泊まり、寝具を支給し、朝も晩も食事を世話する人がついている。司徒侯霸は前から光と仲がいい。人を派遣して光を説得した。「先生は身分が低いので、帝に会いたくてもなかなかできない。儀礼のこだわりがあるからだ。先生から頭を下げて言い出したらどうだ。」と。光は何も答えず、口頭で使者に記してもらった。「あなたはすでに宰相の高位におり、甚だよろしい。仁徳を持って陛下を補佐するのは天下が喜ばれる。ごますりをするならば、仲を断とう。」と。霸がそれを読み、帝に報告した。帝は笑いながら、「こいつ、相変わらずぬぼれるものだ。」と言った。帝の馬車はその日に光のところに行つた。しかし、光は起きずに横になったままであった。帝が入つて光の腹をさすりながら「強気の子陵君、私を助けられないの理由とするのか。」と言った。光はまた眼を閉じて返事しなかった。しばらくすると、目を開けてじつと帝を見つめて「昔堯が帝位を譲るのに、許由が耳を洗う。士としては皆自分のポリシーを持っている。迫るまでやるのか。」と言った。帝は「子陵、私もあなたを説得できないのか。」と、溜息をしながら帰った。また光を招き入れて、昔の友情を暖め、「私は昔と比べ、あなたに如何だ。」と聞いた。光は「昔よりもっといい。」と答えた。そこで共に寝起きになった。光が足を帝の腹の上に置いた。翌日、太史が「客星が急に帝の御座にいた。」と報告した。帝は笑いながら、「私は友人嚴子陵と一緒に寝た。」と言った。諫議大夫に任命されたが、就かず、富春山の麓で耕すことになった。後に子陵が釣りをしたところが「嚴陵瀬」と名付けられた。建武十八年（42）家で寿を全うした。八十歳であった。帝が悼んで、詔書を下して、郡県に銭を百万、穀物を千斛嚴子陵の家族に与えよう命じた。

【出典】

嚴光、字子陵、一名遵、會稽餘姚人也。少有高名、與光武同遊學。

及光武即位，光乃變名姓，隱身不見。帝思其賢，乃令以物色訪之。後齊國上言，有一男子披羊裘釣澤中，帝疑其光，乃備安車玄纁，遣使聘之，三反而後至，舍於北軍，給牀褥，太官朝夕進膳，司徒侯霸與光素舊，遣使奉書，使人因謂光曰，公聞先生至，區區欲即詣造，迫於典司，是以不獲。願因日暮自屈語言。光不答。乃投札與之，口授曰，君房足下，位至鼎足，甚善。懷仁輔義，天下悅。阿諛順旨，要領絕。霸得書，封奏之。帝笑曰，狂奴故態也。車駕即日幸其館，光臥不起，帝即其臥所撫光腹曰，咄咄子陵，不可相助為理邪。光又眠不應。良久，乃張目熟視曰，昔唐堯著德，巢父洗耳，士故有志，何至相迫乎。帝曰，子陵，我竟不能下汝邪。於是升輿歎息而去。復引光入，論道舊故相對累日，帝從容問光曰，朕何如昔時。對曰，陛下差增於往。因共偃臥，光以足加帝腹上。明日，太史奏客星犯御座甚急，帝笑曰，朕故人嚴子陵共臥耳。除為諫議大夫，不屈，乃耕於富春山，後人名其釣處為嚴陵瀨焉。建武十七年，復特徵不至，年八十終於家，帝傷惜之，詔下郡縣，賜錢百萬，穀千斛。(南朝宋・范曄撰『後漢書』卷一百十三，逸民列傳第七十三)

【作例】

「嚴子陵」(明・天然撰『歷代古人像讚』、弘治十一年 [1498] 刊本)

「嚴子陵」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物五卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「嚴子陵」(清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年 [1743] 刊本)

「嚴光」(『任渭長畫傳四種』高士傳、中国古畫譜集成第四卷、山東美術出版社、2000年)

「光皇論舊」(元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』卷四、嘉靖二十一年 [1542] 序刊本)

「子陵釣澤」(『圖像合璧君臣故事句解』、寛文二十二年 [1672] 跋、延寶二年 [1674] 和刻本)

「咄咄詞」(嚴先生)(清・金古良編・繪『無雙譜』、康熙二九〇三八
年 [1690-1699] 刊本)

「嚴子陵」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷一、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

「嚴子陵」(某岡之繪『繪圖の林』卷上、元禄二年 [1689] 刊本)

げんしんし 玄眞子

↓「張志和」

げんじんしたいあん 元人施耐庵

元人施耐庵は長編小説『水滸伝』の作者である。

【作例】

「元人施耐庵」(葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年 [1829] 序、萬極堂梓)

げんじんしょうけい 元人小景

【作例】

「元人小景」(老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』下卷、享和三年 [1803] 序、文化六年 [1809] 叙刊本)

げんせき 阮籍

阮籍(210～263)、字は嗣宗といい、陳留尉氏(河南省尉氏)の人である。魏の丞相の掾である阮瑀の子である。籍は容姿が男らしく、性格が大らかで、個性が強い。喜んで怒っても顔に表れない。時には家に閉じこもって読書し、数か月も出てこない。時には山水の間をさまよって、帰るのも忘れるほどである。書物を博覧し、とりわけ老莊を好む。酒が好きで嘯くことができる。琴を弾くのが得意であり、自分

の世界に入ると、まわりのことを忘れる。時の人は彼を「アホ」(痴)と呼んでいるが、従兄文業だけが彼を敬服している。自分よりはよくできる。そのため、皆が籍を称賛するようになった。籍は元々世に役立つ志を持っていたが、あいにく魏晋の時代に生まれたので、天下が動乱で、政治が不安定である。名士が身を全うことができるのはなかなか難しい。故に籍も世の中と距離を保ち、遂に酒に耽つてしまった。文帝は最初武帝のために籍と姻戚関係を結びたかったが、籍は六十日間酔つ払って、ついにこのことを潰した。鍾会は今々時事のことで尋ね、籍の罪を編みだかつたが、結局酔つ払つていふことで逃げ切った。文帝が太祖を補佐する際、籍は真剣に帝に言った、「籍は生涯東平に遊覧しているのです、その風土が好きである。」と。帝は大喜びで、即日東平相に任命した。そこで籍は驢馬に乗って郡に着任して、役所の壁を壊した。内も外も互いに見えるようになり、法令も簡略化した。十日間で帰ってきた。帝は大將軍從事中郎に任命した。役所から報告があつた。それはすなわちある子供が母親を殺してしまつたという。籍は「おや、父を殺すのはよくわかるが、母親までか。」と首をかしげた。その場にいる人は彼の失言に責めた。帝は「父親を殺すのは天下の極悪であるが、殺していいのか。」と言つた。籍は「獣は母親を知っているが、父親を知らないのだ。父親を殺すのは獣のやることだ。母親を殺すのは、獣にも及ばないのだ。」と説明して、皆はようやく納得した。籍は歩兵營の料理人が酒を醸造するのが得意で、酒を三百斛貯蔵していると聞き、歩兵校尉の職を求めた。それは閑職とはいえ、よく府内に行けるし、朝廷の宴会にも参加できる。ある時のことである。帝は禪譲しようとしたが、臣下たちがそれを阻止しようとした。皆阮籍に上奏文の作成を依頼した。籍は酔つ払つて忘れてしまった。皆が府に詣でに行く際、籍のところを上奏文を取りに行つたら、なんと籍が机にうつむいて眠っていた。使者が上奏文のこ

とを尋ねると、籍がすぐ作文した。一字も直さなかつた。言葉は非常にインパクトがあつた。時の人に高く評価された。籍は儒家の説教に拘らないが、人の悪口を言わない。親孝行であり、母親が亡くなつた際、ちようど人と囲碁を対戦しているところであつた。対戦者が中止を求めたが、籍は聞き入れなく、決戦を要求した。その後、酒を二斗飲んで、大声で泣き出すと、血を数升吐いた。会葬の際、一匹の蒸し子豚を食べ、二斗の酒を飲み、それから母親と別れのことを述べ、ひたすら言葉もないといい、泣き出すと、また数升の血を吐いた。体が痛むほど瘦せた。

【出典】

阮籍字嗣宗，陳留尉氏人也。父瑀，魏丞相掾，知名於世。籍容貌瓌傑，志氣宏放，傲然獨得，任性不羈，而喜怒不形於色。或閉戶視書，累月不出。或登臨山水，經日忘歸。博覽羣籍，尤好莊老。嗜酒能嘯，善彈琴。當其得意，忽忘形骸。時人多謂之癡，惟族兄文業每歎服之，以爲勝己。由是咸共稱異。「中略」籍本有濟世志，屬魏晉之際，天下多故，名士少有全者，籍由是不與世事，遂酣飲爲常。文帝初欲爲武帝求婚於籍，籍醉六十日，不得言而止。鍾會數以時事問之，欲因其可否而致之罪，皆以酣醉獲免。及文帝輔政，籍嘗從容言於帝曰，籍平生曾游東平，樂其風土。帝大悅，即拜東平相。籍乘驢到郡，壞府舍屏鄣，使內外相望，法令清簡，旬日而還。帝引爲大將軍從事中郎。有司言有子殺母者，籍曰，嘻，殺父乃可，至殺母乎。坐者怪其失言。帝曰，殺父，天下之極惡，而以爲可乎。籍曰，禽獸知母而不知父，殺父，禽獸之類也。殺母，禽獸之不若。衆乃悅服。籍聞步兵廚管人善釀，有貯酒三百斛，乃求爲步兵校尉。遺落世事，雖去佐職，恒游府內，朝宴必與焉。會帝讓九錫，公卿將勸進，使籍爲其辭。籍沉醉忘作，臨詣府，使取之，見籍方據案醉眠。使者以告，籍便書案，使寫之，無所改竄。辭甚清壯，爲時所重。籍雖不拘禮教，然發言玄

遠、口不臧否人物。性至孝，母終，正與人圍碁，對者求止，籍留與決賭。既而飲酒二斗，舉聲一號，吐血數升。將及葬，食一蒸豚臍，飲二斗酒，然後臨訣，直言窮矣，舉聲一號，因又吐血數升。毀瘠骨立，殆致滅性。（唐・房玄齡等撰『晉書』卷四十九，列傳第十九）

【作例】

「阮籍」（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』卷五、道光一〇年〔1830〕刻本）

「阮籍」（橘有税撰『繪本故事談』卷三、正徳四年〔1714〕刊本）

げんせんさんざい 阮瞻三語

晉の阮瞻（281-310）は、字は千里といい、阮咸の子息である。司徒王戎が聖人の名教と老莊の自然の異同について尋ねたが、瞻は「將無同」と答えた。戎が感心し、彼を官吏として任命した。時に「三語掾」と呼ばれたという。（唐・房玄齡等撰『晋書』卷四十九）

【出典】

晉阮瞻字千里，始平太守咸之子。性情虛寡欲自得於懷。讀書不甚研求。而默識其要。遇理而辯，辭不足而旨有餘。見司徒王戎。戎問曰，聖人貴名教，老莊明自然。其旨同異。瞻曰，將無同。戎咨嗟良久。即命辟之。時謂之三語掾。永嘉中爲太子舍人。瞻素執無鬼神論，自謂，此理可以辯正幽明。忽有客通名謁瞻。瞻與之言，良久及鬼神之事，反覆甚苦。客遂屈。乃作色曰，鬼神古今聖賢所共傳，君何得獨言無。即僕便是鬼。於是變爲異形，須臾消滅。瞻大惡，歲餘病卒。（唐・李瀚撰『蒙求』卷上）

【作例】

「阮瞻三語」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷六、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

げんせんじょうとう 阮宣杖頭

阮脩（270-311）は、字は宣子といい、阮咸の姪である。『易』や『老子』を好み、清談が得意である。出掛ける際、よく杖に百錢を掛け、酒屋に行き、痛飲したという。↓ 阮脩

【出典】

〔晉書〕阮脩字宣子，咸從子也。好易，善清言。性簡任不修人事。常步行，以百錢掛杖頭，至酒店便獨酣暢。雖當世富貴，而不肯顧。家無儋石之儲，晏如也。與兄弟同志，常自得於林阜間。王衍與脩談易，言寡旨暢。衍嘆服焉。脩居貧，年四十餘未有室。王敦等斂錢爲婚。皆名士也。時慕之者，求人入錢而不得。後爲太子洗馬。避亂爲賊所害。（唐・李瀚撰『蒙求』卷上）

【作例】

「阮宣杖頭」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷一、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

げんそう 玄宗

唐の玄宗帝（712～756在位）、名前は李隆基といい、睿宗帝の三番目の子である。母親は昭成皇后竇氏である。はじめは楚王だったが、後に臨淄郡王になった。景龍四年（710）、皇太子になり、延和元年（712）、即位した。はじめは姚崇、宋璟を宰相に任用して、積極的に新政を進め、生産の向上を促進した。また、吐蕃を破って、契丹と手を組んで突厥を防御して、外敵の脅威から国を守った。天竺、波斯、新羅などの諸外国は皆使者を派遣して来朝するようになった。それはすなわち有名な「開元の治」の時期である。天寶四年（755）、玄宗帝は楊太真を貴妃にし、李林甫、楊国忠を宰相に任用した。天寶十四年、安祿山が史思明と結託して反乱を起こした。すなわち「安史の乱」で

ある。天寶十五年、玄宗帝は蜀に避難し、帝位を皇太子に譲り、太上皇となった。至徳二年(757)、玄宗帝は長安に戻った。寶応元年(762)、崩御し、年は七十八歳であった。

【出典】

玄宗至道大聖大明孝皇帝諱隆基、睿宗第三子也、母曰昭成順聖皇后寶氏。垂拱元年秋八月戊寅、生於東都。性英斷多藝、尤知音律、善八分書。儀範偉麗、有非常之表。三年閏七月丁卯、封楚王。天授三年十月戊戌、出閣、開府置官屬、年始七歲。朔望車騎至朝堂、金吾將軍武懿宗忌上嚴整、訶排儀仗、因欲折之。上叱之曰、吾家朝堂、干汝何事、敢迫吾騎從。則天聞而特加寵異之。「中略」延和元年六月、兇黨因術人聞睿宗曰、據玄象、帝座及前星有災、皇太子合作天子、不合更居東宮矣。睿宗曰、傳德避災、吾意決矣。「中略」上意惶懼、馳見叩頭、請所以傳位之旨。睿宗曰、吾因汝功業得宗社。今帝座有眚、思欲避避、唯聖德大勲、始轉禍為福。易位於汝、吾知晚矣。上始居武德殿視事、三品以下除授及徒罪皆自決之。「中略」上元二年四月甲寅、崩于神龍殿、時年七十八。羣臣上諡曰至道大聖大明孝皇帝、廟號玄宗。(後晉・劉昫等撰『舊唐書』卷九、本紀第八・九)

【作例】

「唐玄宗」(明・天然撰『歷代古人像讚』、弘治二年 [1493] 刊本)
 「唐玄宗像」(明・王圻・王思義撰『三才圖會』人物二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「明皇步蟾」(『列仙降凡傳』、萬曆三十二年 [1604] 刊本)
 「唐明皇遊月宮」(明・□爾登竹溪主人『精刻選百家珠璣聯』卷一、崇禎元年 [1628] 刊本)
 「唐明皇宴京師侍老圖」(元・王恽撰、清・徐鄴、李文田補圖「欽定元王恽承華事略補圖」卷一、光緒二十二年 [1896] 刊本)

げんのたいし 元太子

【作例】

「元太子」(普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橋辨次守国「橋辨次」圖書『畫典通考』卷八、享保十二年 [1727] 刊本)

けんだこく 乾陀國

乾陀國は昔尸毘王の倉庫であつた。火事に遭ひ焼失してしまい、その焦げた米を一粒食べると、一生病氣にならないという。

【出典】

乾陀國昔尸毘王倉庫、爲火所燒蕩、粳米焦者、至今尚存。得一粒服之、則終身不患瘧也。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷)

【作例】

「乾陀國」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)
 「乾陀國」(橋有稅圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年 [1719] 刊本)

けんとう 拳頭

「拳頭」は禪宗の公案の一つである。

【出典】

師「注」趙州從諗禪師「到一庵主處、問、有麼有麼。主竖起拳頭。師曰、水淺不是泊船處。便行。又到一庵主處、問有麼有麼。主亦竖起拳頭。師曰、能縱能奪、能殺能活、便作禮。問僧、一日看多少經。曰、或七八、或十卷。師曰、闍黎不會看經。曰、和尚一日看多少。師曰、老僧一日祇看一字。(宋・普濟撰『五燈會元』卷四、南泉願禪師法嗣)

【作例】

「拳頭」(橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年 [1687])

刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

けんどうしんいくほうし 陰道神郁保四

↓「陰道神郁保四」

けんどうしんいくほうし 陰道神郁保四

郁保四は『水滸伝』の中の一人の豪傑であり、綽名は「陰道神」という。後に梁山泊に入った。

【出典】

話説當時段景住跑来、對林冲等說道、我與揚林、石勇前往北地買馬。小弟到彼、選得壯鼠有筋力好毛片駿馬、買了二百餘匹。回至青州地面、被一夥強人、爲頭一箇、喚做陰道神郁保四、聚集二百餘人、盡數把馬劫奪、解送曾頭市去了。(百二十回本『水滸伝』第六十八回)

【作例】

「郁保四」(和刻本、清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年 [1835] 刊本)

「陰道神郁保四」(葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸伝』、文政一二年 [1829] 序、萬極堂梓)

「陰道神郁保四」(仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『繡像水滸銘々傳』前編下、弘化五年 [1848] 刊本)

げんとく 玄徳

↓「劉備」

【作例】

「玄徳」(溪斎義信筆『溪斎浮世畫譜』)

「玄徳」(文鳳駿聲繪『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 刊本)

「玄徳」(文鳳駿聲繪『文鳳籙畫』、享和三年 [1803] 刊本)

げんとく・こうめい 玄徳・孔明

↓「草廬三顧」

【作例】

「玄徳・孔明」[長谷川筆] (『本朝畫林』卷上、寶曆二年 [1752] 刊本)

げんとくやくばだんけいとぶず

玄徳躍馬跳檀溪圖

↓「的顛」

【作例】

「先主跳檀溪」(『至治新刊全相三国志平話』卷中、至治 [1321] 刊本)

「玄徳躍馬跳檀溪圖」(『三国志通俗演義』卷四、萬曆十九年 [1591] 刊本)

「玄徳躍馬跳檀溪圖」(『李卓吾先生批評三国志』第三十四回、建陽呉觀明刊本)

「玄徳躍馬跳檀溪圖」(橘有税『橘氏宗兵衛』撰『繪本寫寶袋』卷七、享保五年 [1720] 刊本、明和七年 [1770] 橘氏守国再板)

「玄徳檀溪」(溪斎義信筆『溪斎浮世畫譜』)

げんとくしゅう 元徳秀

元徳秀(696～754)、字は紫芝とくしゅう、河南(河南洛陽)の人である。父親は延州刺史であった。元徳秀は唐の開元二十一年(733)進士に及第し、邢州南和尉になったが、後に魯山令になった。魯山令だった頃、ある盜賊が刑務所に入った。ちょうど県の境に虎の害があり、盜賊が虎を殺して罪を償うことを願った。徳秀はそれを許可し

たが、下の官吏たちは反対した。「盗賊は信用できない。勝手に釈放すると、おそらく問題になるだろう。」と。徳秀は「私は彼に約束通りやってほしい。もし問題があれば、私は責任を負う。」と言った。すぐ縛りはずして、釈放した。翌日、盗賊が虎を背負って戻ってきたという。天寶十三年(754)、亡くなった。年は五十九歳であった。

【出典】

元徳秀者、河南人、字紫芝。開元二十一年登進士第。性純樸、無緣飾、動師古道。父爲延州刺史。徳秀少孤貧、事母以孝聞。開元中、從鄉賦、歲遊京師、不忍離親、每行則自負板輿、與母詣長安。登第後、母亡、廬於墓所、食無鹽酪、藉無茵席、刺血畫像寫佛經。久之、以孤幼牽於祿仕、調授邢州南和尉。佐治有惠政、黜陟使上聞、召補龍武錄事參軍。徳秀早失怙怙、縲麻相繼、不及親在而娶、既孤之後、遂不娶。族人以絕嗣規之、徳秀曰、吾兄有子、繼先人之祀。以兄子婚娶、家貧無以爲禮、求爲魯山令。先是墮車傷足、不任趨拜、汝郡守以客禮待之。部人爲盜、吏捕之繫獄、會縣界有猛獸爲暴、盜自陳曰、願格殺猛獸以自贖。徳秀許之。胥吏曰、盜詭計苟免、擅放官囚、無乃累乎。徳秀曰、吾不欲負約、累則吾坐、必請不及諸君。即破械出之。翌日、格猛獸而還。誠信化人。大率此類。「略」天寶十三年卒、時年五十九、門人相與諡爲文行先生。士大夫高其行、不名、謂之元魯山。(後晉・劉昫等撰『舊唐書』卷一百九十下、列傳第一百四十下)

【作例】

「元紫芝像」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物六卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「元徳秀」(橘有税撰『繪本故事談』卷四、正徳四年 [1714] 刊本)

けんこく 懸渡國

懸渡國は鳥耗の西にあり、山や溪流のため、交通が不便で、綱によつて渡らなければならぬ。住民は岩の間に石室を作り、手をつないで川水を飲む。いわゆる猿引きはそれであるという。

【出典】

懸渡國在鳥耗之西、山溪不通、但引繩而渡。土人但與石間壘石爲室、接手而飲、互相牽引、所謂猿引是也。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷)

【作例】

「懸渡國」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「懸渡國」(橘有税撰『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 刊本)

げんちよう 阮肇

↓「劉阮天台」

げんふううげき 阮孚蠟屐

阮孚は、字は遙集といい、阮咸の息子である。彼が安東參事や從事中郎に任ぜられたが、終日酒に耽る。そのため、よく役所に注意された。孚の趣味は履である。ある客が孚を訪ねたところ、孚が履に蠟をかけ磨いているとことであるという。

【出典】

晉書、阮孚字遙集、始平太守咸之子。元帝以爲安東參事。蓬髮飲酒、不以王務嬰心。轉從事中郎。終日酣縱、常爲有司所按。遷散騎常侍。嘗以金貂換酒。復爲所司彈劾。帝宥之。初祖約性好財、孚性好屐。

同是累、而未判其得失。有詣約。是正料財物。客至、屏當不盡。餘兩小籠。以著背後、傾身蔽之。意未能平。或有詣阮。正見其蠟屐。因自歎曰、未知一生當著幾量屐。神色閑暢。於是勝負始分。終廣州刺史。(唐・李瀚撰『蒙求』卷下)

【作例】

「阮孚蠟屐」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷九、享和元年[1801]序刊本、河内屋等發行)

けんほういちろ 乾峯一路

「乾峯一路」は禪宗の公案の一つである。乾峯和尚は越州(浙江省紹興)の人である。ある僧侶が乾峯に「十方の薄迦梵、一路の涅槃門。道の尽きるところがどこなのかはよく分らない」と聞いた。乾峯和尚は杖を持って地面で描きながら、「ここだ」と答えたという。

【出典】

越州乾峯和尚、上堂、法身有三种病、二種光、須是一一透得、始解歸家穩坐、須知更有向上一竅在。雲門出、問、庵内人為甚麼不知庵外事。師呵呵大笑。門曰、猶是學人疑處。師曰、子是甚麼心行。門曰、也要和尚相委。師曰、直須與麼始解穩坐。門應、喏喏。上堂、舉一不得舉二、放過一著、落在第二。雲門出衆曰、昨日有人從天台來、卻往徑山去。師曰、典座來日不得普請。便下座。問僧、甚麼處來。曰、天台。師曰、見說石橋作兩段、是否。曰、和尚甚處得這箇消息來。師曰、將謂華頂峯前客、元是平田莊裏人。問、如何得出三界去。師曰、喚院主來、趁出這僧著。師問、衆僧輪迴六趣、具甚麼眼。衆無對。僧問、如何是超佛越祖之談。師曰、老僧問肇。曰、和尚問則且置。師曰、老僧問尚不奈何、說甚麼超佛越祖之談。問、十方薄迦梵、一路涅槃門。未審路頭在甚麼處。師以拄杖畫云、在這裏。(宋・普濟撰『五燈會元』卷十三、洞山价禪師法嗣)

【作例】

「乾峯一路」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年[1687]刊本、文政一年[1818]再刊本)

げんほうはちしゅん 阮放八儔

晉の阮放(280-333)は、字は思度といい、時の人は、古代の「八儔」に擬えて、阮放を「宏伯」、郗鑿を「方伯」、胡母輔を「達伯」、卞壺を「裁伯」、蔡謨を「朗伯」、阮孚を「誕伯」、劉綏を「委伯」、羊曼を「黯伯」と呼び、八人の名士を「八伯」としたという。

【出典】

晉書、羊曼字延祖、少知名。歷晉陵太守。任達類縱、好飲酒。溫嶠、庾亮、阮放、桓彝同志友善。並為中興名士。時州里稱阮放為宏伯、郗鑿為方伯、胡母輔之為達伯、卞壺為裁伯、蔡謨為朗伯、阮孚為誕伯、劉綏為委伯、而曼為黯伯、凡八人號兗州八伯。蓋擬古之八儔也。(唐・李瀚撰『蒙求』卷上)

【作例】

「阮放八儔」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷二、享和元年[1801]序刊本、河内屋等發行)

げんゆうしちろう 元祐七老

宋の元祐(1086-1094)頃、來光復、孫諭、吳師道、梁宏、賈亨彦、張叔達、唐兪といった七人が同時に官を辞し、時々集まり、酒を飲み、詩を賦した。彼らは「元祐七老」と呼ばれていた。

【出典】

元祐七老。元祐中、七人同時掛冠。五日一集、飲酒賦詩。來光復、孫諭、吳師道、梁宏、賈亨彦、張叔達、唐兪。(明・張九韶撰『羣書拾唾』卷五)

【作例】

「元祐七老」〔『點石齋叢書』、光緒二十一年〔1895〕序、上海點石齋書局石印本〕

「元祐七老」〔大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年〔1809〕序刊本〕